安田女子大学紀要　38，43-50　2010.

学科公開講座における学際的アプローチ

―― 名スピーチをコミュニケーションに活かそう！ ――

橘野　実子・立花　知香・三宅　重徳

An Interdisciplinary Approach to a University Extension Course: An Application of Classic Public Speeches to Communications

Jitsuko KITSUNO, Chika TACHIBANA and Shigenori MIYAKE

は　じ　め　に

本稿は，2009年３月に開催された安田女子短期大学秘書科公開講座「名スピーチをコミュニケーションに活かそう！貴方はオバマ派？それとも…」における学際的アプローチの概要を説明し，その意義について考察をおこなうものである。

Ⅰ．秘書科DIY教育システムと20周年記念事業

本学秘書科では，DIY教育システムを開発し，平成20年度より学科教育課程全体にわたってそれを展開している。DIY教育システムの目的は，自主性，積極性を備えた前向きな人材を育成することであるが，特に「課題探求能力」の育成を目指し，教育課程と教育課程外活動を統合するシステムとして構築されている（仁井・吉田・立花，2009）。

多くの学生にとって，短大生活の中で，卒業後をしっかり見据えて目的を持って学生生活を送るのは難しいようである。なぜ秘書科に入学したかがはっきりしなかったり，卒業後の進路を決めかねたり，目的はあってもその実現方法が明確化されていない学生も存在する。短期大学の課題として，２年間という限られた期間で，学生が社会に通用する高い教養と専門知識をいかに習得することができるかがあげられるが，そのための能力をDIY教育システムでは「課題探求能力」と定義している。

課題探求能力を修得するために，さまざまなプロジェクトや教育課程外活動を学生の社会活動の実体験の場に見立て，学生に企画段階から参加してもらい，授業で学んだことを活用しながら，課題発見と解決の場を与えている。

そのような学生参加のプロジェクトの一つに，秘書科20周年記念事業があげられる。秘書科は1988年に設置されたが，2008年で20周年を迎え，2009年３月には20期生を社会に送り出した。秘書科20年の歩みを記念し，2009年３月に秘書科創立20周年記念交歓会・公開講座を開催したが，これはDIY教育システムの一環として位置づけられ，企画から学生がかかわり実現したものである。

20周年記念事業の内容は交歓会と公開講座であったが，公開講座は4講座が開講され，その一つが以下で詳述するスピーチに関する講座「名スピーチをコミュニケーションに活かそう！貴方はオバマ派？それとも…」である。

Ⅱ．学際的アプローチ

20周年記念講演会のスピーチ講座は学際的なアプローチを取ることを当初から模索していた。これは，伝統的な分析手法とは異なった観点からスピーチを捉えることによって，新たな成果をあげることが期待できたからである。

2008年は米国で大統領選挙のおこなわれた年であり，日本でも大統領候補者たちの政策やスピーチは注目を浴びた。橘野の担当する英語授業で，オバマ大統領（当時は大統領候補）の大統領選勝利演説を取り上げたところ反響が大きかったため，放課後の時間を利用して英語スピーチ研究会を立ち上げた。週に一度，アメリカの名スピーチを取り上げて，語彙や文の意味を解釈し，文体を研究し，レトリックやコミュニケーションスタイルなども話し合った。オバマ大統領だけでなく，ケネディ大統領，キング牧師，ヒラリー・クリントン米国務長官などのスピーチを視聴もしくは聞き取る時間となった。

その研究会でコメントをする教員の立場として困難を覚えたのは，スピーチのプレゼンテーション方法の評価である。橘野は言語学，応用言語学，文学が専門であるため語彙や文体の選択，文章の論理性や説得力などに対してはある程度の評価ができるが，パフォーマンスとしてのスピーチに関しては詳しくないため，コメントは印象をもとに感想を言う程度であった。このことから，スピーチを分析的に評価し，さらに自分自身のスピーチパフォーマンスを高めるための教材とするには，言語学の立場からのアプローチだけでは不十分であると考えられた。

そんな折に企画された秘書科20周年記念講演会のテーマとして，「スピーチ」があげられた。学生にとって，社会人として自立するために必要なスキルに「自分を場に応じて適切に表現する」があるが，それはよいスピーチを通して学習できると考えられる。記念講演会は公開講座であるが，多くの聴衆は秘書科の学生であることが予想できたし，また一般の方にとってもスピーチパフォーマンスは関心のあるところなので，英語のスピーチを取り上げることとした。秘書科には言語分野が専門の橘野と三宅，そしてパフォーマンス学が専門の立花が在籍するため，それぞれの専門を活かせば，スピーチに効果的にアプローチすることが可能と考えた。

Ⅲ．スピーチに対するパフォーマンス学と言語学からのアプローチ

1．パフォーマンス学の視点からとらえたスピーチ

(1) 本邦におけるパフォーマンス学

パフォーマンス学は本邦に導入されて以来，社会学者ゴフマンの，日常の社会的状況での行為を演劇の演技や演出法と同様の観点から分析可能なものとして捉えようとするパフォーマンス論を理論的視座に置いている。そして，その研究は一貫して机上の論理構築にとどまらず実践的なパフォーマンス教育の考え方と手法を構築するものである。

Goffmanは，パフォーマンスを「日常生活における自己呈示（presentation of self in everyday

life)」(1959), つまり, 肯定的なイメージや社会的承認を意識した意図的な行為であると考え,「ある〈パフォーマンス〉とは，ある特定の機会にある特定の参加者が何らかのしかたでほかの参加者の誰かに影響を及ぼす挙動の一切」(ゴフマン，1974，p.18）と定義している。これを踏まえて，佐藤（1995）はパフォーマンスの定義を「日常生活における個の善性表現」としている。

パフォーマンス学はおおまかに演劇学，心理学，社会学および文化人類学，スピーチ・コミュニケーション学の４つの学問領域にまたがる学際学問である。ともすると，パフォーマンスという言葉は，まやかし，ごまかし，はったり等の否定的感情を助長しかねない意味合いで使われる傾向にあるが，そもそもperformanceという用語はそのような意味を含んでいない。あえて「善性表現」と定義づけるように，「『場』と『かかわり』の質を正確に読み取って，そのステージとその相手に応じて最も効果的な自分を伝えていくこと。それがパフォーマンスの基本的な考え方」(佐藤，1998）である。

(2) スピーチ・コミュニケーション分野との関係

パフォーマンス学の重要な基本研究領域の一つとして，スピーチ・コミュニケーション分野がある。この領域の研究は，古代ギリシャ時代からあるレトリックの流れをくんだ雄弁術(elocution）研究に音声や顔の表情，身体表現などの非言語表現の要素が加わり，研究領域が拡大している。

他者にメッセージを発信する時に，どのような言葉（verbal communication）を用いるのか，どのように表現（nonverbal communication）するのかはいずれも重要な自己呈示の手段の問題である。正確に相手に情報を伝えようとするならば，言語を的確に用いることは当然のことである。しかし,「その時の気分や顔の表情，姿勢，動作，ジェスチャーなどは言葉以上の意味を持つことがある。発せられた言葉と，ノンバーバル表現が一致しない場合，人は往々にして言葉を信用しない。むしろ行動を判断の基準とする。」とマレービアン (1986) が述べるように, ノンバーバル表現をきちんと理解し効果的に使うことも対人関係においては重要である。

パフォーマンス学では，パフォーマンスの要素を言語的パフォーマンスと非言語的パフォーマンスに大別している。そのうち非言語的パフォーマンスは周辺言語，表情・アイコンタクト・スマイル，身体表現，空間の使い方，色彩，モノによる自己表現，タイム＆タイミングの7つの構成要素からなる。言語のみならず非言語的パフォーマンスも訓練しだいで上達するものである。対人コミュニケーション場面で的確に自己の意志や感情を他者に伝達するためにも自己のパフォーマンスを磨くことが望ましい。パフォーマンスのトレーニングは，これらの要素の機能を理解して総合的にコントロールし場と相手とのかかわりに応じて適宜自己呈示できるようになることを目指すものである。

対人コミュニケーション場面の中でも，スピーチは極めて意図性が高い自己呈示の一つである。今回教材として取り上げた政治家のスピーチはただ聞いてもらえれば良いという程度のものではない。スピーカーの立場からすれば，スピーチを聞いた聴衆を「この人に政治を任せたい」,「自分たちのリーダーにふさわしい人である」と納得させ，支持が得られなければ成功とはいえない。そのためにも，スピーチは聴衆に訴える言語の内容と非言語的パフォーマンスが一致したものでなくてはならない。

2.　言語学からのアプローチ

パフォーマンス学の下位領域であるスピーチ・コミュニケーション分野においては，スピーチの要素は，言語的パフォーマンスと非言語的パフォーマンスに大別されるが，言語学の立場から見たスピーチは，言語的要素に主に焦点があてられる。

スピーチに使用される語彙や文体を分析するには，一般的に文体論（stylistics）や社会言語学の談話分析の立場から語られる。社会言語学の分野では非言語表現までも研究領域に広げている場合があるので，パフォーマンス学と社会言語学に高い垣根はないとも言える。両分野ともにそれ自身が学際的な色合いが濃い。しかし中でも，文章の論理構造，語彙選択などは言語学の得意とする分野である。言語学は言語現象の分析をその主な研究対象にしており，どのように伝えるかという部分は，その応用分野として発展しているが，実際に研究成果の教育分野への積極的な応用となると，パフォーマンス学に一日の長がある。

Ⅳ. 公　開　講　座

1.　講座の目的

この講座は, 効果的な自己呈示の例として著名なスピーチを取り上げ, そのスピーチを言語面・非言語面の両面から分析することで，自己表現の方法を学ぶことを目的とした。講座に参加する在学生については，社会人として自立する準備の一助となることを目指し，入学予定の高校生については，秘書科での学習内容の予備講座としての活用を，一般の受講生については，日常生活への応用が目標であった。

2.　題　　材

公開講座では，2008年１月ニューハンプシャー州での民主党大統領予備選のオバマ大統領（当時は上院議員）による敗戦スピーチと，慈善活動で有名なマザーテレサのスピーチを取り上げた。

オバマ大統領の演説の人気については日本でも2008年春ごろから注目され始め，民主党大統領候補指名受諾演説と大統領選勝利演説は新聞やテレビなどで大きく報道された。オバマ大統領のスピーチは，効果的なコミュニケーションの方法を模索するのに格好の教材である。今回の講座の主な受講者である在学生と入学予定の高校生は，オバマ大統領が選挙運動中に使った“Yes, we can”というキャッチフレーズは知っているがその意味するところはよく知らないと予測できたため，“Yes, we can”のフレーズを効果的に使い有名になったニューハンプシャー・スピーチを取り上げることとした。

しかし，当然ながらスピーチはいつもオバマ大統領のように話さなくてはいけないというものではない。その時と場合に応じて違ったものになるし，また演説者の性別，職業によっても，違ったタイプのスピーチが適することがある。そこで，政治家以外の職業の女性によるものということで，マザーテレサのスピーチを選択した。題材としては，ノーベル平和賞授賞式での平和の祈り，ハーバード大学卒業式でのスピーチ，そして修道会入会志願者の若い女性たちに語りかけている場面の３本を準備した。

3.　講義概要

講義は，(1) オバマ大統領のスピーチの言語面の分析，非言語面の分析，(2) マザーテレサの

スピーチの言語面の分析，非言語面の分析，という構成ですすめた。言語面の分析とスピーチ翻訳を橘野と三宅がおこない，非言語面を立花が担当した。

オバマ大統領のスピーチの文体の特徴は，繰り返しの多用，韻を踏んだ表現，具体例を伴った語りなどで，相手を自分のストーリーに引き込む仕掛けが随所になされている。有名な“Yes, we can”は，スピーチ後半で，リフレインとして各段落の最後に繰り返し挿入されている表現である。独立宣言の時代の先達者の信念，西部開拓時代や奴隷解放運動の精神，参政権を求めた女性の思い，月面着陸を目指した科学者の魂を例に，アメリカ合衆国の歴史とその精神を振り返りながら，そのすべてには“Yes, we can”という思いとそれに伴う行動があったと述べており，その精神を持って，今後もアメリカの繁栄と世界への貢献を目指そうと結んでいる。アメリカの理想を語る前向きな語り口に聴衆が共感している様子がビデオから伺える。

また，キング牧師やケネディ大統領のスピーチを思い起こさせる表現も見られ，その意味では過去の効果的なスピーチをよく研究し，その伝統の上に立ったものでもある。キング牧師の“I have a dream”のスピーチの終盤のフレーズ“let freedom ring[1]”（自由の鐘を鳴り響かせよう）を想起させる箇所がニューハンプシャー・スピーチでも一番最後に現れる。

> We will begin the next great chapter in America's story with three words that will ring from coast to coast; from sea to shining sea ? Yes. We. Can.（そして私たちはともにアメリカ物語の次の偉大な章を３つの言葉で始めるのです。海岸から海岸へ，海から輝く海へと響かせるのです。Yes We Canと。）
>
> （ Obama for America headquarters, 2008）

また，ケネディ大統領の有名な“ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country”を思わせる箇所が以下の部分である。

> But the reason our campaign has always been different is because it's not about what I will do as President, it's also about what you, the people who love this country, can do to change it.（しかし，私たちの選挙活動が常に他と異なる理由は，大統領として何をするかというだけではなく，みなさんが，この国を愛する人々が，この国を変えることができるという点なのです。）
>
> （Obama for America headquarters, 2008）

非言語面から見たオバマスピーチの特徴をいくつか挙げる。身体表現では，スピーチの内容に合わせて上半身を巧みに使っていることが挙げられる。人は動きのあるものに目をとめ興味を引かれる。彼のスピーチでは力強く腕が上下に動く。スピーチの後半では聴衆のボルテージが上昇するのと呼応するように，自身の腕の振りも大きくなってより一層の力強さが感じられる。また，力強さだけでなく，全体をとおして，身体ごと少しずつ向きを変えるように聴衆に向かって語りかける態度からは冷静さや落ち着きが感じられる。教材として使用したVTRにはないが，スピー

1　この一節自体，キング牧師のオリジナルではなく，19世紀から歌われている米国の愛国歌「アメリカ」（“My Country, 'Tis of Thee”（わが祖国，そは汝のもの））から引用されたもので，1939年には黒人オペラ歌手マリアン・アンダーソンが黒人であるがゆえの妨害を乗り越え，ワシントンDCのリンカーン記念堂で歌った歴史的経緯がある（カーソン＆シェパード，2003）。そのリンカーン記念堂で，キング牧師の“I have a dream”のスピーチが行われ，また同じくリンカーン記念堂で執行されたオバマ大統領の就任式では，ソウル歌手アレサ・フランクリンがこの「アメリカ」を歌った。

チに入る前から堂々と余裕を感じさせる身体表現が見られる。彼は，声援に応えるように時に立ち止まって，にこやかに観衆に視線を向ける。このようなゆっくりと時間をかけて登壇する姿などは落ち着いた雰囲気を感じさせる演出でもある。このような態度は，観客にとってもスピーカー自身にとってもスピーチへのマインドセット（準備）の時間を与える。

周辺言語としては，ゆっくりとしたスピードから始まり，後半の力強さをアピールする内容に入るにしたがって，韻を踏む表現や繰り返しを用いて，畳み掛けるようなアップテンポで進む。観衆が盛り上がっている場面では，スマイルを浮かべじっくりと間を取り静寂を待ち，再びスピーチを始める。大統領という立場の人間に求められる資質やイメージを意識した戦略的な演出があって，彼はそれを徹底して演じている。そのように観衆の様子に応じて冷静に緩急を使い分ける一面，観衆の歓喜という刺激を受けて自分自身も高揚し動作が派手に大きくなるなどの変化があり，観衆を飽きさせない非言語表現の使い方である。

一方，マザーテレサのスピーチはオバマ大統領とは違った部分が多い。キリスト教の修道女であるマザーテレサは，一貫して静かに神の言葉を語る。オバマ大統領のような，リフレインや劇的な盛り上げはなく，淡々と話す印象である。言語表現と非言語表現が一致すればより信憑性が高くなる。非言語面では，高齢であること，小さな体格であること，その身体を包み隠す白いサリーが，威圧感のない言語表現と相まって一層の神聖さを観衆に与える。劇的な表現を用いなくても，give offされる雰囲気で観衆を引きよせ「この人の言うことを聞いてみよう」と思わせることが可能である。彼女はスピーカーとしては主役であるが，マザー自身は果たして主役を張ろうと考えて登壇しているだろうか。マザーの意図が，神の使いという立場で，自分を介して神のメッセージを伝えるというものならば，小さい体をなお小さく清らかに見せるという演出は適切であろう。大統領選挙に代表されるような政治家の演説では個人がどのような人であるか，万人にわかりやすく示す表現の方が，判断基準を与えやすいため聴衆にとっては望ましい。一方，個性をできるだけ抑えた表現を用いる方が見せる表現を抑えた分だけ想像力をかきたてるということもある。意図的であることに政治的なスピーチと変わりはないが，自然に醸し出される（give offされる）ような表現は，彼女の飾らない実直な聖職者としての信憑性を高め，人を惹きつける。言語面でいうと，わかりやすい飾らない英語を用い，直截的である。修辞的な特徴は，修道女らしく聖書の言葉の引用が多いことである。

また，マザーテレサのビデオに，若い志願者たちに語りかけているものがあるが，語りの対象者は20人ほどで，マザーは一人ひとりの顔を見渡すように話している。パブリックな場ではなく，若い同志に対するスピーチは両者が近接しており，親近感を持ちやすい空間づくりがされている。マザーは優しい視線とゆっくりとした口調，落ち着いた低めの音声で語りかける。20人を目まぐるしくざっと見渡すのではなく，指導者としてワンフレーズごとに小さいエリアの人に絞ってアイコンタクトをとり，確かめるように語られている。

4. 受講生の反応

公開講座の参加者は在学生，入学予定の高校生が中心だったが，社会人である卒業生や他大学の教員，一般の方なども少数ながら受講していた。社会人の受講生からは，実社会で役立つ話だった，人前で話す仕事だが話し方のポイントがわかった，という感想をいくつか聞き取った。

受講生の多くを占めた在学生には，レポート課題を課したが，その中には以下のような反応が

あった。

・どの演説も，堂々としていて，なおかつ強い意思を持って演説に臨んでいることがすごくよくわかった。それは，顔の表情やしぐさに表れていた。日本人には，すごく惹きつけられるような演説をする方もいれば，ただ長いだけで何か言いたいのかわからない演説をする人もいる。
・日頃から「相手へ伝える」ということを常に意識して話すようにしたい。
・マザーテレサのスピーチを聞き，よいスピーチとは結局その人の人間性によって生み出されるものだと感じました。
・オバマさんのように，大事なところは区切ってゆっくりと，はっきり皆に話しかけるように話したい。そうすると相手の心にひびく気がする。文の構成や言葉の研究もしたいと思う。

自身のコミュニケーションスキルに関する課題を公開講座の内容と結びつけるものが多く,「誰に，何を，どのように伝えるか」という点を考えるきっかけになったようである。

まとめと今後の課題

今回の講座は，スピーチの紹介と分析を中心に，言語学とパフォーマンス論の立場から多面的に展開した。受講生の反応からは，講座からコミュニケーションのヒントを見出した例があることがうかがえるが，そのヒントを行動にうつすための実践講座の実現が将来的には必要だと思われる。講座の最終目的であるところの，日常生活への応用や就職活動での実践を果たすためには，分析した内容を応用するスピーチ実習（演習）をおこなうことが望ましいが，人数と時間の制約で実現できなかった。

しかし，秘書科DIY教育システムの１セクションとしてこの講座を捉えると，公開講座の内容は秘書実務や英語の授業と関連しているため，学生自身が各自の課題を解決する手がかりをそこから発見して行動することが期待できる。英語授業でのスピーチの分析，英語スピーチ研究会での活動,「秘書実務」での非言語面を中心にした表現方法の指導などを公開講座との関連で捉え，各自の課題を解決していくことができれば，この講座の目的は達成されたといえよう。公開講座を企画すること自体がDIY教育システムの一環であるが，講座の内容面においても，公開講座と教育課程の融合，そしてその教育内容の実生活での応用がDIY教育システムの一部となっている。

引　用　文　献

カーソン, S. & シェパード, K. 編（梶原寿監訳）2003.『私には夢がある　M. L. キング説教・講演集』新教出版社.
佐藤綾子，1995.『自分をどう表現するか―パフォーマンス学入門』講談社.
佐藤綾子，1998.『佐藤綾子のパフォーマンス学講座』PHP研究所.
仁井和彦・吉田行宏・立花知香，2009.「「課題探求能力」の育成を目指すDIY教育システム　－愛されて20年秘書科の挑戦（最近の試み）－」『安田女子大学紀要』37，265-278.
マレービアン, A.（西田司・津田幸男・岡本輝人・山口常夫訳）1986.『非言語コミュニケーション』聖文社.
Goffman, E., 1959, *Presentation of self in everyday life*. New York; Doubleday/Anchor
ゴフマン, A.（石黒毅訳）1974.『ゴフマンの社会学１行為と演技－日常生活における自己呈示』誠信書房.
Obama for America headquarters, 2008. *Video: Yes we can*.〈http://　my.barackobama.com/page/

community/post_group/ObamaHQ/CGTN〉

〔2009. 9. 28　受理〕